

僕と図書館

鈴木輝康

僕がこの大学に入学を志願した大きな動機の一つは図書の蔵書が多いことであった。もし僕が講義に魅力を感じなくなっても、いつまでも学問に対する興味を失わずに学問が続けられるであろうと思ったからです。

図書館の蔵書は古文書が多く、洋書、自然科学系の和書が少な過ぎると聞いたこともあったが、図書館の魅力はまだ僕の心から去ってはいない。

僕はまだ1年生なので図書館も教養部図書室、附属図書館、アメリカ研究センター図書室ほどしか利用していません。教養部図書室は講義科目の復習ぐらいが精一杯で、附属図書館は夜間も利用できますから、復習も含め、一般教養の書籍を利用し、アメリカ研究センター図書室は時間的に制限されていますが、利用者も少なく、非常に静かで落ち着いて、じっくりと本が読め、洋書の社会科学、人文系の本を時々暇をみつけては読んでいます。

借り出した本の中には初めの一章ほどは活字の見えないほど、やたらとペンで線が引かれていたり、書き込みのしてある本がある。こういった本は非常に読みにくく、読むのが嫌になってしまうこともあり

ます。利用者はもっと公共のものを大切にしないと行く末も案じられます。

ちょっとあの本のある章が読んでみたい時もある、少し専門的な本を求めますが、教養部図書室や附属図書館は在庫が少ないものですから、大学内に本はあっても、研究室や部局図書室に所蔵されていて、利用しにくいこともありますので、大学でも最も利用度の高い両図書館の蔵書内容の充実を図って欲しいと思います。

僕が両図書館について不思議に思うことは語学に関する本が文学部とかそれぞれの研究室には多いのですが、両図書館とも少ないことです。語学上の疑問の生じるところにいつでも利用できるようなもっと豊富に揃えてもよいと思っています。また種々の分野の芸術に関する本がもっと多くあっても良いのではないかと思っています。

附属図書館の閲覧室の広すぎるのが、かえって利用上、逆効果を生じていることは、これまで多くの先輩などが指摘されていますし、できるだけ早い機会に、十分将来の利用を検討した上で、利用者が気軽に、しかも落ち着いて読書ができるよう改善していただきたいと思っています。

新入生のことで分らないことは多くありますが、ただ気の付いたことを述べてだけです。今後、図書館が自分のものであると同時に、みんなのものであるという時が来ることを期待しています。

(医学部一回生)

「小沢芦庵」展開催

江戸中期の歌壇に「たゞごと歌」を提唱して、歌論に作歌に活躍した京都歌壇の雄、小沢芦庵(1723~1801)に関する展覧会を、今年度読書週間に因んで、11月9日~11日の3日間開催した。

陳列室にその著作の原本、自筆本、筆蹟等約70点を展示するとともに、10日午後2時から会議室において、鈴鹿三七氏および芦庵研究の第一人者医博中野武氏の芦庵についての講演会を開催し、芦庵顕彰に大きく貢献した。

「ビュッヒャー文庫」の整理再開

— 経済学部 —

後期歴史学派の経済学者カール・ビュッヒャー教授の蔵書約9,000点の整理が経済学部で今年度から再開されることになった。この文庫は大正13年故岩崎小弥太氏によって本学経済学部に寄贈され、当時一部分整理が行なわれたが、その後長く中断されていたものである。内容は経済学、統計学、新聞学などにわたり、現在では容易に入手できないものも多数含まれている。従来より学内外から、しばしば目録出版を要望する声があったので、経済学部では同文庫の整理終了後、できるだけ早い機会に目録の出版にとりかかりたいとの希望をもっている。